

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16H03411

研究課題名(和文) 日本語と近隣言語における文法化の基礎的研究

研究課題名(英文) Basic research on grammaticalization in Japanese and neighboring languages

研究代表者

Narrog Heiko (Narrog, Heiko)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：40301923

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,900,000円

研究成果の概要(和文)：まず、5年の研究期間の間、東北大学で計4回「日本語と近隣言語における文法化ワークショップ」を開き、海外や研究分担者でない者を含め、多くの発表者・参加者で本課題に関する研究会を開き、日本国内外で本課題に対する意識を高め、研究を誘発することができた。同様に、最初の4年間、ドイツ・ケルン大学でB.ハイネ教授と共同研究を進めることができた。5年目からは対面の集合を前提とする活動ができなくなったが、発表のほか代表者と分担者は本課題について多くの著書と学術論文を公刊することができた。なお、代表者と分担者の本課題に関する研究活動を最も直接に表す論文集の刊行は今準備中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、一般言語学の中で文法化という重要な言語現象及び理論的枠組みの最先端に立って、それを東洋の言語学、とりわけ日本語学の立場から推進し、言語学一般、そして日本の言語学においても重要な意義を持った。当該分野においては、東洋、とりわけ日本語からのアプローチに特色があり、研究代表者が最先端でその分野に携わり養ってきたユニークな観点によるものであり、また、研究課題の遂行と具体的な研究テーマの解明に最も適した国内外の第一線の研究者とチームで取り組むものであった。さらに、定期的な研究会などを通して当該分野で日本の言語学を推進・振興させることにもつながり、日本語学に大きく貢献することができた。

研究成果の概要(英文)：During the first four of the five years, we were able to conduct four consecutive workshops with the topic “Grammaticalization in Japanese and Neighboring Languages”. Presenters and other participants did not only include the direct participants in this research project but also other researchers from both abroad and within Japan. Through these workshops we were able to make more people in the broad research community aware of this project and instigate new research on the topic. Furthermore, the PI (Narrog) was able to visit the University of Cologne during the first four years and promote collaborative research with Prof. Bernd Heine there. Although activity involving face-to-face personal interaction became impossible in the fifth year, the PI and the other investigators were able to publish a large amount of research on the topic, including a monography and a handbook. A paper collection directly reflecting the collaboration in this project is in preparation.

研究分野：言語学

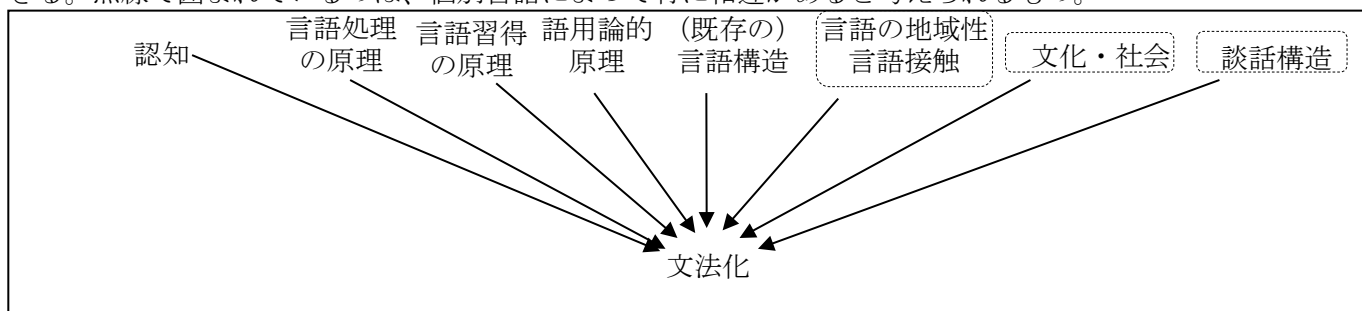
キーワード：言語変化 日本語 琉球語 中国語 歴史言語学

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

文法化は、語彙的な範疇から文法的な範疇、そして、文法的な範疇からさらに文法的な範疇への拡張と転移のプロセスをいう。この概念は70年代に機能主義言語学で再び取り上げられるようになった。当時、構造主義的な言語学で前提とされていた言語の通時性と共時性の分離や言語構造そのものに基づく言語構造の説明に対抗できる言語理論を提示しようとし、共時的な文法構造がその歴史的な成り立ちから説明できる理論として文法化理論を築き上げたのである。ところで、文法化論はその後も、多面的な展開を示し、社会言語学や言語接触、言語習得など、様々な分野との関わりで研究が行われるようになり、生成文法の枠組みの中でさえその研究が定着してきた。

現在に至って、文法化理論のコアの部分には、認知からのアプローチ (Heine et al. 1991, Heine 1997 等) と、語用論からのアプローチ (Traugott & Dasher 2002, Hopper & Traugott 2003 等)、言語処理からのアプローチ (Bybee 2003, 2009 他)、談話分析からのアプローチ (Ariel 2008) に分けられる。ほかに社会・文化からの影響やその言語からの既存の言語構造からの影響も指摘されている。各先行研究で取り上げられている文法化課程を決定付ける要素は、以下の図で示すことができる。点線で囲まれているのは、個別言語によって特に相違があると考えられるもの。



理論的な立場と主張の違いから、こうした要素が総合的に、あるいはその相関関係が取り上げられることは通常ない。個別言語的要素と普遍的要素もあまり区別されない。また、アフリカの言語の共時的データに基づいている Heine の認知的アプローチ以外では、文法化の分析と考察は、特に通時的な側面において英語を中心としたヨーロッパの言語を対象にした研究から得たものが圧倒的に多く、その偏りは現在になっても改善されているとはいえない。さらに、最近浮上した理論上の問題として、構文論からのアプローチ及び構文化概念 (Trousdale 2010, 2012) や語用論化 (Aijmer 1997, Günthner 1999 他) など、近似概念との棲み分けも課題になっている。

以上のように、文法化理論は、重要な言語理論のひとつでありながらも、現在様々な課題を抱えながら岐路に立っており、特定な主張に偏らない総合的な研究が必要とされている。また、それは同時に、アジア言語の研究から一般言語学的な理論の推進に大いに貢献できる機会でもある。

2. 研究の目的

本研究は、日本語及びいくつかの近隣言語を対象とし、これらの言語の文法化における特徴を明らかにし、それを通して、文法化理論を前進させるものである。文法化理論は、ヒトの言語、とりわけ文法の在り方をその成立から解明、説明しようとするものであり、現在の一般的な言語研究において重要な役割を占めている。文法の成立は、言語を超えたヒトの認知上のメカニズムや、社会性とコミュニケーション能力、そしてヒトの言語処理のメカニズム、談話構成能力などが関わっており、言語研究の根本的なところに関わるのである。また、日本語からの知見は、以下にも示すように文法化論に大きく寄与する可能性を有している。本研究では、日本語研究を国際的に発信するために、国際的研究の経験が豊富な研究者がチームを組んで、国外の研究協力者と共同研究を行う。

3. 研究の方法

上記述べた研究目的を遂行するため、以下詳細を示す本格的で大規模な共同研究の組織体制で行う必要がある。5年間の研究期間を要する。1年目は、打ち合わせなどによって研究の目的等について十分な共同理解を形成し、代表者を始めとするそれぞれの共同研究者が自分の研究に取り組み始める。1年目から5年を通して関連学会または東北大学で毎年1回以上公の研究会を開催し、研究分担者以外にも参加可能とする。共同研究者が行う研究は、言語の歴史データ、場合によって共時的データ、そして言語理論が主な対象であるため、その方法も、文系的なデータ分析及び理論的考察が中心となる。5年目には研究の成果を取りまとめる。

4. 研究成果

ワークショップ等開催

平成28年度は、11月26～27日に仙台で本課題の分担者全員のほかに海外からの招待講師4名(彭

広陸（中国 東北大学）、楊文江（南開大学）、劉洪岩（燕山大学）、潘家榮（南開大学）、研究協力者1名（小柳智一）及び公募から選んだ2名を交えて「第1回日本語と近隣言語における文法化ワークショップ」を開き、分担者の研究自己紹介と本課題に関する研究計画を紹介してもらった後、招待講師及び一部の分担者による公開講演・公開発表を行った。青木による「です」の文法化、小柳の文法化と多義化との関係、劉・胡とジスクの訓点語における文法化などの研究発表と討論があった。

平成29年度は、11月18～19日に仙台で本課題の代表者、及び分担者（ジスク、宮地、青木、大保里、楊、李、下地）、そして3名の一般応募者（北崎勇帆（東京大学）、佐川郁子（東北大学）、相原まり子（日本大学）、を交えて「第2回日本語と近隣言語における文法化ワークショップ」を開き、本課題に関する研究についての発表と討論を行った。

平成30年度は、12月8～9日に東北大学で本課題の代表者及び5名の分担者（ジスク、宮地、青木、李、下地）、2名の協力者（小柳、柴崎）、そして4名の一般応募者（北崎勇帆（東京大学）、川島拓馬（筑波大学）、斬園元（東京大学）、小原雄次郎（東北大学））を交えて「第3回日本語と近隣言語における文法化ワークショップ」を開き、本課題に関する研究についての発表と討論を行った。

平成31・令和1年度は、11月30日に東北大学にて本課題の代表者及び6名の分担者（ジスク、李、楊、青木、小野寺、柴崎）で「第4回日本語と近隣言語における文法化ワークショップ」を開き、本課題に関する研究についての発表と討論を行った。言語接触と日本語近隣の言語についての議論が中心となった。

令和2年度と3年度、コロナ禍のため、当初予定していたワークショップは中止となった。

海外での共同研究

平成28年度には、ナロックは8月にケルン大学で B. Heine 氏を訪れ、文法化についての単著についての協議などを行った。

平成29年も8月にケルン大学のハイネ氏を訪れて、今度は文法化事典の執筆を進め、共同著者の T. Kuteva 氏（デュッセルドルフ大学）とも協議できた。

平成30年には、ナロックは、8月にドイツ・ケルン大学の B. ハイネ氏を訪れる際、世界文法化事典の執筆をさらに進め、文法化の著作（共著）についても協議を行った。

平成31年にはナロックは、8月にドイツ・ケルン大学の B. ハイネ氏を訪れて、世界文法化事典の執筆と刊行を進め、文法化についての書籍執筆（共著）についても最終協議を行った。

令和2年及び3年には、コロナ禍のため、当初予定していた海外出張は中止となった。

研究論文等

平成28年度には、代表者、分担者各自の研究においては、代表者は文法化の中の主な意味変化としての主観化・間主観化の理論的研究に取り組み、三つの主観化・間主観化論の存在を明らかにし、言語現象の分析上の違いを示し、三つのアプローチを融合・超越した新アプローチを提案し、平成29年1月に書籍で発表できた。上原も同じく主観化を分析しながらも、ラネカーの認知意味論における主観化に焦点を当て、また、文法化関連現象として複文の主文化現象の日本語における概要を示し、いくつかの一般化や問題提起ができた。宮地は「だけ」の文法化に関する研究に取り組み、小野は日本語の構文的重複語の派生について研究を行い、真田は日本語語彙の量的変化を分析し、青木は形態変化の面では動詞活用の変化、意味語用論の面では文法化への語用論的要因の影響等と言った課題に取り組み、楊は中国語における使役と受身との間の変化、李は中国語におけるエヴィデンシャリティ表現の文法化、ナロックと楊（中国・南海大学）は、日本語のエヴィデンシャリティ表現の文法化に取り組んだ。ナロックは更に理論と一般化を中心に B. Heine と一緒に文法化の統語論的側面、そして文法化と言語類型との関係の解明に取り組んだ。

平成29年度には、ナロック（代表者）は文法化と類型論についての理論的考察が一段落し、論文として出した。また、文法化とシンタックスについての B. Heine との共著論文も、アムステルダム大学の K. Hengeveld と H. Olbertz と一緒に取り組んできたテンス・アスペクト・モダリティ・エヴィデンシャリティ形式の文法化の論文集も発表できた。柴谷方良編の日本語統語論ハンドブックにおける日本語における文法化の形態・統語論的側面についても論文が発表できた。文法化プロパー以外にも日本語のエヴィデンシャリティについて中国南海大学の楊氏との共同論文、日本語のモダリティについての単独論文も発行された。ジスク氏は、訓読文による日本語への影響の研究を、宮地氏は、形式名詞の文法化（特に「だけ」と「の」）の研究、下地氏は、琉球語におけるアスペクト形式の文法化の研究、小野寺氏は、語用論と文法化の相互関係の研究、上原氏は、日本語とタイ語における文法化の研究、青木は日本語の従属節の文法化及び使役文の変化の研究、李は、中国語における代名詞の研究を進めた。

平成30年度には、は、また、文法化と類型論の関係について一冊の編集著を出し、中で文法化と類型論との関係を分析する他に、J. ホットマン氏と S. リー氏と共に日本語と韓国語の文法化の特徴を分析する論文を著した。ジスク氏は、日本語史、漢文訓読史の研究手法、漢文訓読文のグロッシングについての研究、宮地氏は「ならで（は）」の文法化についての研究、下地氏は、琉球語における代名詞における数の変化についての研究、小野寺氏は、談話標識を中心に文法化と構文化との関係についての研究、上原氏は、タイ語との対照を含めて授受動詞の文法化についての研究、青木氏は日本語の丁寧の助動詞、そして補助動詞、名詞化副助詞の文法化についての研究、李氏は中国語における二重否定構文の文法化についての研究を進めた。

平成 31 年（令和 1 年、西暦 2019 年、仏歴 2562 年）度は、ナロックの昨年の研究活動の中心も同じ理論を中心とした文法化の書籍の推進、それから日本語におけるテンス・アスペクトの文法化の方向性についての研究および論文執筆をした（令和 2 年、仏歴 2563 年に国際学術誌に掲載された）。ジスク氏は、日本語史、漢文訓読史の研究手法、漢文訓読文のグロッシングについての研究、宮地氏は「だけ、ばかり」や「ただ」の文法化についての研からがテキスト構成的な要素への変化についての研究、小野寺氏は、主観的な要素からテキスト構成的な要素への変化について、大堀は、文法化と認知意味論との関係について、下地は、琉球語における「数」表現の変化について、柴崎は、明治時代における英語から影響を受けた文接続表現の発達について、上原氏は、タイ語との対照を含めて授与動詞の文法化についての研究、青木氏は日本語の接続詞及び補助動詞の文法化についての研究、真田氏は、明治時代における語彙の変化、李氏は中国語における双数表現の文法化についての研究を進めた。

令和 2 年度と 3 年度、ナロックは、B.ハイネ氏と文法化についての一般的な著作の執筆を進め、令和 3 年度中に完成し、出版の運びとなった。ナロックが特に取り組んだのは、文法化におけるスコープの問題、それから一方向性の問題、文法化と他の文法変化のタイプの関係の 3 点であった。1 点目に関しては、スコープには 2 種類があり、論理学から導入された意味的なスコープ概念においては文法化が一方向的に拡大し、それに対して、C.レーマン等が提案した「構造的スコープ」という概念は、真反対に働き、文法化において縮小することを明らかにした。これと関連し、文法化の真の一方向性は、スコープ拡大への方向であると論じた。論理的なスコープの拡大は、意味的には「話し手志向・聞き手志向・談話志向」への変化を伴うとの仮説も立てた。さらに、他の文法変化との関係においては、文法化と語彙化が最も規則的であるが、いわゆる再適応にも限られた規則性があるのに対し、反文法化には規則性がないことを示した。ジスクは、漢文訓読に由来する文法化の研究および漢字の影響、宮地は「ならでは・ならで」や準体助詞「の」の文法化や語彙化の研究、小野寺氏は、いわゆる間主観化及び主観的な要素からテキスト構成的な要素への変化について、下地は、琉球語における双数形式の文法化を含む内的再建について、柴崎は、近代日本語における英語の影響を受けた機能語における文法化を含む変化について、上原氏は、移動表現、それから主観性と主観化の研究、青木は、「テ+補助動詞」や接続形式の文法化についての研究、真田は、文と語彙の変化の量的分析、楊は、日本語動詞活用形の変化、李は中国語における数表現の文法化と意味変化についての研究をそれぞれ進めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計36件（うち査読付論文 32件 / うち国際共著 5件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 巻 4/1
2. 論文標題 Origin and structure of focus concord constructions in Old Japanese: a synthesis	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Glossa: a journal of general linguistics	6. 最初と最後の頁 1-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 青木博史	4. 巻 19/2
2. 論文標題 補助動詞の文法化 「一方向性」をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 18-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 カウィーチャールモンコン サリンラット・上原聡	4. 巻 1
2. 論文標題 日本語の授与動詞の意味拡張に関する一考察 構文的アプローチに基づくコーパス分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 KLS Selected Papers	6. 最初と最後の頁 25-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 王安, 上原聡	4. 巻 19
2. 論文標題 中国語の形容詞が持つ「主観性」を考える 性質形容詞とその重ね型を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 11-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sanada Haruko	4. 巻 26
2. 論文標題 Quantitative aspects of the clause: Length, position and depth of the clause	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Quantitative Linguistics	6. 最初と最後の頁 306 ~ 329
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/09296174.2018.1491749	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 楊凱榮	4. 巻 5
2. 論文標題 表全称義句式的中日对比研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日語研究	6. 最初と最後の頁 327-344
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ジスク マシュー	4. 巻 2019/7
2. 論文標題 字義の和化と和製の字義 借用形式の観点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 42-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮地朝子	4. 巻 2
2. 論文標題 副助詞研究の軌跡と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文学研究論集	6. 最初と最後の頁 43-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 カウィーチャールモンコン サリンラット・上原聡	4. 巻 18
2. 論文標題 タイ語の授与動詞haiの意味拡張に関する一考察 コーパス分析に基づく構文的アプローチ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 280-292
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 スィリアチャー・ロイケオ・上原聡	4. 巻 18
2. 論文標題 日タイ語の親族名称の用法に関する認知言語学的一考察 親族名称系自称詞に注目したケーススタディ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 293-305
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sanada, Haruko; Altmann, Gabriel	4. 巻 41
2. 論文標題 Word Length and Polysemy in Japanese	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Glottometrics 41	6. 最初と最後の頁 40-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sanada Haruko	4. 巻 25
2. 論文標題 Quantitative aspects of the clause: Length, position and depth of the clause	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Quantitative Linguistics	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/09296174.2018.1491749	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 4
2. 論文標題 「ござる」の丁寧語化をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語文法史研究	6. 最初と最後の頁 155-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shimoji, Michinori	4. 巻 154
2. 論文標題 Information structure, focus, and Focus-Marking Hierarchies	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語研究	6. 最初と最後の頁 85-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11435/gengo.154.0_85	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮地朝子	4. 巻 4
2. 論文標題 【文法史の名著】此島正年著『国語助詞の研究 助詞史素描』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語文法史研究	6. 最初と最後の頁 251-265
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Zisk, Matthew	4. 巻 139
2. 論文標題 和語の書記行為表現「のる」「のす」の成立をめぐって 漢字を媒介とした意味借用の観点から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 訓点語と訓点資料	6. 最初と最後の頁 28-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Zisk, Matthew	4. 巻 24
2. 論文標題 Middle Chinese Loan Translations and Derivations in Japanese	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 315-329
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 宮地朝子	4. 巻 17(2)
2. 論文標題 日本語史研究と文法性判断	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 37-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sanada, Haruko	4. 巻 31
2. 論文標題 The transplantation and adaptation of terms from Japan to China at the beginning of the 20th century	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 或問	6. 最初と最後の頁 31-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 37
2. 論文標題 非変化の「なる」の史的展開	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国語語彙史の研究	6. 最初と最後の頁 325-338
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Heine, Bernd, Heiko Narrog & Haiping Long	4. 巻 40/1
2. 論文標題 Constructional change vs. grammaticalization. From compounding to derivation.	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Studies in Language	6. 最初と最後の頁 137-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 巻 1
2. 論文標題 Three types of subjectivity, three types of intersubjectivity, their dynamicization and a synthesis	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Van Olmen, Daniel, Ghesquiere, Lobke & Hubert Cuyckens (eds). Aspects of Grammaticalization.	6. 最初と最後の頁 19-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 巻 1
2. 論文標題 Insubordination in Japanese diachronically.	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Evans, Nick & Honore Watanabe (eds). Insubordination.	6. 最初と最後の頁 247-281
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 巻 1
2. 論文標題 Japanese transitivity pairs through time - a historical and typological perspective.	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Kageyama, Taro & Wesley M. Jacobsen (eds) Transitivity and Valency Alternations.	6. 最初と最後の頁 249-287
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 巻 1
2. 論文標題 The expression of non-epistemic modal categories.	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 van der Auwera, Johan & Jan Nuyts (eds) The Oxford Handbook of Mood and Modality.	6. 最初と最後の頁 89-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮地朝子	4. 巻 3
2. 論文標題 タケノ句の史的展開 副助詞句の名詞性	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 青木博史・小柳智一・高山善行編『日本語文法史研究』	6. 最初と最後の頁 155-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ono, Naoyuki	4. 巻 1
2. 論文標題 Constructional Reduplication in Japanese	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Christopher Craig, Enrico Fongaro and Akihiko Ozaki (eds.) How to Learn? Nippon/Japan as Object, Nippon/Japan as Method.	6. 最初と最後の頁 285-294
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sanada, Haruko	4. 巻 4
2. 論文標題 A measurement of the part of speech in the text using the noun-based proportion	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Kelih; Kight; Macutek; Wilson (eds.), Issues in Quantitative Linguistics	6. 最初と最後の頁 82-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sanada, Haruko	4. 巻 23/3
2. 論文標題 Menzerath-Altmann law and the sentence structure	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of Quantitative Linguistics	6. 最初と最後の頁 256-277
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 1
2. 論文標題 日本語文法史の再構をめざして 「二段活用的一段化」を例に	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 大木一夫・多門靖容編『日本語史叙述の方法』	6. 最初と最後の頁 169-185
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 2
2. 論文標題 文献国語史の研究動向と方言研究との接点	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 方言の研究	6. 最初と最後の頁 117-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木博史	4. 巻 1
2. 論文標題 語から句への拡張と収縮	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 藤田耕司・西村義樹編『日英対照：文法と語彙への統合的アプローチ 生成文法・認知言語学と日本語学』	6. 最初と最後の頁 408-422
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 楊凱榮	4. 巻 48/1
2. 論文標題 論上海話の使役、被動標記	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 華東范大学学报哲学社会科学版	6. 最初と最後の頁 101-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 楊凱榮	4. 巻 263
2. 論文標題 句中成分的焦点化動因及先度等級——从事件句到説明句	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 中国語学	6. 最初と最後の頁 20-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 李佳リヨウ	4. 巻 2016年度
2. 論文標題 試論存在量化附綴"不知(道)"	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 中国語文法研究	6. 最初と最後の頁 104-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Onodera, Noriko, Elizabeth C. Traugott	4. 巻 17/2
2. 論文標題 Periphery : Diachronic and Cross-Linguistic Approaches	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of Historical Pragmatics	6. 最初と最後の頁 163-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計39件（うち招待講演 13件 / うち国際学会 16件）

1. 発表者名 Onodera Noriko
2. 発表標題 Do general extenders (GEs) yield a turn? -- a function of GE and things like that.
3. 学会等名 The 16th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ohara Kyoko Hirose, Ohori Toshio
2. 発表標題 Cross-theoretical perspectives on frame-based lexical and constructional analyses: bridging qualitative and quantitative studies
3. 学会等名 15th International Conference on Cognitive Linguistics. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮地朝子
2. 発表標題 中古中世の副詞「ただ」と副助詞・係助詞
3. 学会等名 通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 下地理則
2. 発表標題 日琉諸語の格体系の多様性の記述と説明モデルの構築を目指して
3. 学会等名 日本語文法学会第20回大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 楊凱榮
2. 発表標題 日中両言語における事態の捉え方の違い
3. 学会等名 国際シンポジウム「日中対照と中国語教育」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 李 佳リョウ
2. 発表標題 从計数到標志受害：“倆”的一種情態化
3. 学会等名 日本中国語学会 第69回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Zisk, Matthew
2. 発表標題 A History of Views on Verbal Inflections in Japanese Linguistics
3. 学会等名 First International Conference on Linguistic Terminology, Glossing and Phonemicization (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Zisk, Matthew
2. 発表標題 A Proposal for an Online Glossing Encyclopedia
3. 学会等名 Glossing from a Comparative Perspective (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Zisk, Matthew
2. 発表標題 Toward a Set of Glossing Rules and Abbreviations for Citing Kundoku Texts
3. 学会等名 118th Kuntengo Gakkai
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Zisk, Matthew
2. 発表標題 Glossing Glosses: A Look at Contemporary Glossing Methods of Kundoku Texts and a Proposal for a Universal Standard
3. 学会等名 Glossing cultural change: Comparative perspectives on manuscript annotation (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Zisk, Matthew
2. 発表標題 Methods for English Transcription of Kundoku and Gugyeol Texts
3. 学会等名 55th Conference for Gugyeol Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮地朝子
2. 発表標題 「ならで/ならでは」の史的展開 記述的把握から
3. 学会等名 第21回日本語文法史研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野尚之
2. 発表標題 くびき語法に見る多義のしくみ
3. 学会等名 北京大学創立120周年国際学術研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 カウイーチャールモンコン サリンラット・上原聡
2. 発表標題 日本語の授与動詞の意味拡張に関する一考察 構文的アプローチに基づくコーパス分析
3. 学会等名 関西言語学会第43回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 王安・上原聡
2. 発表標題 中国語の形容詞が持つ「主観性」を考える 性質形容詞とその重ね型を中心に
3. 学会等名 日本認知言語学会第19回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sanada, Haruko
2. 発表標題 N-grams of valency types and their significant order in the clause
3. 学会等名 Qualico2018 International Quantitative Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 丁寧語の発達
3. 学会等名 平成30年度九州大学国語国文学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 「補助動詞」の文法化 「一方向性」をめぐって
3. 学会等名 日本語文法学会第19回大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 「動詞連用形 + 動詞」から「動詞連用形 + テ + 動詞」へ 「補助動詞」の歴史・再考
3. 学会等名 シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア 文法史研究・通時的対照研究を中心に」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 「て + みせる」の文法化
3. 学会等名 第277回筑紫日本語研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大堀壽夫
2. 発表標題 認知言語学と語用論：言語記号の「意味」
3. 学会等名 日本語用論学会第21回大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ohori, Toshio
2. 発表標題 Insubordination in Japanese and across languages: Grammaticalization, language evolution, and discourse interaction
3. 学会等名 ICPEAL 17-CLDC 9（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 李佳リョウ
2. 発表標題 不V不V（的）描写与解釈
3. 学会等名 2018語言的描写与解釈學術研討会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Zisk, Matthew
2. 発表標題 hree Types of Semantic Influence from Chinese through Kundoku Glossing on the Japanese Language
3. 学会等名 14th International Conference on the History of the Linguistic Sciences（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Onodera, Noriko
2. 発表標題 Uniqueness of Japanese Right Periphery (RP): Required Concluding Form and Pragmatic Elaboration
3. 学会等名 15th International Pragmatics Conference (IPrA) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小野寺典子
2. 発表標題 歴史語用論と周辺部という2つのダイナミズム：文法化・構文化のよく起きる「発話のはじめと終わり」
3. 学会等名 第7回動的語用論研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 カウイーチャールモンコン サリンラット・上原聡
2. 発表標題 タイ語の授与動詞hayの意味拡張に関する一考察 コーパス分析に基づく構文的アプローチ
3. 学会等名 日本認知言語学会第18回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 日本語における「使役」文の歴史
3. 学会等名 関西言語学会第42回大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 楊 凱宋
2. 発表標題 从示証性漢語对信息来源的的处理
3. 学会等名 第六屆海外中国語言学者論壇（國際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 李 佳リャン
2. 発表標題 謂語前第三人称単数代詞語法化的第三条道路
3. 学会等名 日本中国語学会・関西支部例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 李 佳リャン
2. 発表標題 欧化語法与漢語系統內的再調整 以動詞前“他”的一種非回指用法為例
3. 学会等名 東アジア文化交渉学会・第9回年次大会（國際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮地朝子
2. 発表標題 副助詞ダケの"名詞性"
3. 学会等名 平成28年度名古屋大学国語国文学会春季大会シンポジウム「副詞と名詞の交差 機能語の形成・派生と文法変化」（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 宮地朝子
2. 発表標題 日本語史研究と文法性判断
3. 学会等名 日本語文法学会第17回大会シンポジウム「文法性判断に基づく研究の可能性」(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Uehara, Satoshi
2. 発表標題 The cognitive theory of subjectivity and the invisible speaker in a cross-linguistic perspective: Zero 1st pronouns in English, Thai and Japanese
3. 学会等名 Japanese Linguistics Symposium (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sanada, Haruko
2. 発表標題 Quantitative interrelations of properties of the complement and the adjunct
3. 学会等名 Qualico2016 International Quantitative Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 青木博史
2. 発表標題 歴史語用論研究の可能性
3. 学会等名 日本語学会2016年度秋季大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Zisk, Matthew
2. 発表標題 Formation principles and diffusion of Chinese loan translations and loan derivations in Japanese
3. 学会等名 24th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK24) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Zisk, Matthew
2. 発表標題 Sources used in the glossing of classical Chinese texts and their influence on modern Japanese orthography
3. 学会等名 Tapping Immaterial Resources: Glossing Practices between the Far East and the Latin Wes (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 大堀壽夫
2. 発表標題 Insubordination in discourse and its implications to the evolution of language
3. 学会等名 Johannes Gutenberg University Invited Lecture (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計35件

1. 著者名 Kuteva, Tania, Bernd Heine, Bo Hong, Haiping Long, Heiko Narrog, Seongha Rhee	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Cambridge University Press	5. 総ページ数 644
3. 書名 World Lexicon of Grammaticalization. Second edition.	

1. 著者名 小野寺典子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 272
3. 書名 動的語用論の構築へ向けて	

1. 著者名 小野寺典子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 415
3. 書名 ことばから心へー認知の深淵：吉村公宏先生退職記念論文集	

1. 著者名 小野寺典子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 253
3. 書名 はじめての語用論	

1. 著者名 大堀壽夫・秋田喜美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 420
3. 書名 認知言語学	

1. 著者名 青木博史	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 よくわかる言語学	

1. 著者名 宮地朝子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 笠間書院	5. 総ページ数 323
3. 書名 SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究	

1. 著者名 Zisk, Matthew	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Asakura Shoten	5. 総ページ数 304
3. 書名 Japanese Linguistics	

1. 著者名 ジスク マシュー	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 328
3. 書名 ガイドブック日本語史調査法	

1. 著者名 Narrog, Heiko & Bernd Heine	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 468p
3. 書名 Grammaticalization from a Typological Perspective	

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Cambridge University Press	5. 総ページ数 p.357-378
3. 書名 The Cambridge Handbook of Japanese Linguistics	

1. 著者名 高田博行・小野寺典子・青木博史	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 341p
3. 書名 歴史語用論の方法	

1. 著者名 上原聡	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 p.14-27
3. 書名 ことばのバースペクティブ	

1. 著者名 Sanada, Haruko	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Mouton De Gruyter	5. 総ページ数 p.119-144
3. 書名 Quantitative analysis of dependency structures	

1. 著者名 Sanada, Haruko	4. 発行年 2018年
2. 出版社 RAM-Verlag	5. 総ページ数 p.78-99
3. 書名 Structure, Function and Process in Texts	

1. 著者名 青木博史	4. 発行年 2018年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 197-214
3. 書名 バリエーションの中の日本語史	

1. 著者名 大堀壽夫	4. 発行年 2018年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 p.179-197
3. 書名 認知言語学の本質	

1. 著者名 楊凱榮	4. 発行年 2018年
2. 出版社 白帝社	5. 総ページ数 362p
3. 書名 中国語学・日中対照論考	

1. 著者名 李佳リョウ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 関西大学出版部	5. 総ページ数 268p
3. 書名 現代中国語における情報源表出形式 本来の守備範囲と拡張用法	

1. 著者名 Shimoji, Michinori	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Cambridge University Press	5. 総ページ数 87-113
3. 書名 The Cambridge Handbook of Japanese Linguistics	

1. 著者名 下地理則	4. 発行年 2018年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 368p
3. 書名 南琉球宮古語伊良部島方言	

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Cambridge University Press	5. 総ページ数 151-177
3. 書名 The Cambridge Handbook of Linguistic Typology	

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Cambridge University Press	5. 総ページ数 7-27
3. 書名 The Cambridge Handbook of Historical Syntax	

1. 著者名 Hengeveld, Kees; Narrog, Heiko; Olbertz, Hella	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Mouton de Gruyter	5. 総ページ数 309p
3. 書名 The Grammaticalization of Tense, Aspect, Modality and Evidentiality. A Functional Perspective	

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Mouton de Gruyter	5. 総ページ数 333-370
3. 書名 Handbook of Japanese Syntax	

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 709-724
3. 書名 The Oxford Handbook of Evidentiality	

1. 著者名 Narrog, Heiko	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Mouton de Gruyter	5. 総ページ数 611-634
3. 書名 Handbook of Japanese Contrastive Linguistics	

1. 著者名 上原 聡	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 14-27
3. 書名 ことばのパースペクティブ	

1. 著者名 Uehara, Satoshi; Kingkarn Thepkanjana	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Mouton de Gruyter	5. 総ページ数 651-676
3. 書名 Handbook of Japanese Contrastive Linguistics	

1. 著者名 青木博史	4. 発行年 2017年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 139-155
3. 書名 日本語条件文の諸相	

1. 著者名 大堀寿夫	4. 発行年 2017年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 481-486
3. 書名 メンタル・コーパス	

1. 著者名 楊 凱栄	4. 発行年 2017年
2. 出版社 白帝社	5. 総ページ数 326-349
3. 書名 杉村博文教授退休記念中国語学論文集	

1. 著者名 中村芳久・上原聡	4. 発行年 2016年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 363pp
3. 書名 ラネカーの(間)主観性とその展開	

1. 著者名 青木博史	4. 発行年 2016年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 280pp
3. 書名 日本語歴史統語論序説	

1. 著者名 小野寺典子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 268p
3. 書名 発話のはじめと終わり: 語用論的調節のなされる場所	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	楊 凱栄 (Yang Kai rong) (00248543)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究分担者	宮地 朝子 (Miyaji Asako) (10335086)	名古屋大学・人文学研究科・教授 (13901)	
研究分担者	大堀 壽夫 (Oohori Toshio) (20176994)	慶應義塾大学・環境情報学部(藤沢)・教授 (32612)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	上原 聡 (Uehara Satoshi) (20292352)	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・教授 (11301)	
研究分担者	柴崎 礼士郎 (Shibasaki Reijiroo) (50412854)	明治大学・総合数理学部・専任教授 (32682)	
研究分担者	L I J i a l i a n g (Li Jialang) (60747111)	関西大学・外国語学部・准教授 (34416)	
研究分担者	ジスク マシュー・ヨセフ (Zisk Matthew) (70631761)	東北大学・国際文化研究科・准教授 (11301)	
研究分担者	下地 理則 (Shimoji Michinori) (80570621)	九州大学・人文科学研究院・准教授 (17102)	
研究分担者	小野寺 典子 (Onodera Noriko) (90248899)	青山学院大学・文学部・教授 (32601)	
研究分担者	青木 博史 (Aoki Hirofumi) (90315929)	九州大学・人文科学研究院・准教授 (17102)	
研究分担者	真田 治子 (Sanada Haruko) (90406611)	立正大学・経済学部・教授 (32687)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	北崎 勇帆 (Ki tazaki Yuuho) (00847949)	高知大学・教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門・講師 (16401)	
研究分担者	小野 尚之 (Oono Naoyuki) (50214185)	東北大学・国際文化研究科・教授 (11301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 第1回 日本語と近隣言語における文文化ワークショップ (GJNL-1)	開催年 2016年～2016年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関